

英国王ジェームズ一世治世初期に書かれた 『ヘンリー八世』の歴史的意味

井上 准 治

要 旨

この作品は、近代英国の自立の初期的段階におけるヘンリー八世の国王としての資質の獲得過程を、あえて理想化して描こうとするものである。それは、ジェームズ一世が即位して10年経った時点で、すでに神格化が起きているエリザベス女王の繁栄と栄光の時代に対する観客の郷愁的幻想に繋いで、ことさら豪華な仕立ての舞台で試みられる。しかし、一方で、極めて下世話な民衆的、祝祭的笑いのエピソードによる権力闘争のパロディーや、王の離婚問題におけるセクシュアリティの意義のほめかしによって、価値逆転を起こしたり相対化する視点も提供するものである。本稿は、このような文脈の中で、有力貴族のバッキンガム公と成り上がりの実力者のウルジー枢機卿の間で争われる主導権争いや、王の離婚・再婚問題の劇的過程とその歴史的意味を考察するものである。

キーワード：ヘンリー八世，エリザベス一世，ジェームズ一世，シェイクスピア

はじめに

ヘンリー八世と聞くと、われわれは、ドイツ生まれで同時代の16世紀英国で活躍した肖像画家ハンス・ホルバインが描いた、肘をまげて両腕を腰にあて仁王立ちになった偉丈夫の肖像を思い浮かべ、また、次々に合計六人もの王妃（うち二人は斬首）を娶っていった事実から、英国史上もっとも精力絶倫かつ非情な国王としての強烈な印象を与えられてきたと思われる。それには、例えば、ロンドンのマダム・タッソー館にある彼を六人の王妃たちが取り囲む蠟人形の群像なども一役買っているかもしれない。

しかし、1623年に編まれた第一・二折版のシェイクスピア全集の「歴史劇」中に納められた作品に登場するヘンリー八世は、この印象を覆すように見える。本作品では、最初の王妃との離婚

は自らの欲望からではなく、純粹に宗教的罪悪感にさいなまれた結果であり、表面上は苦悩する「良心」の人としてアピールする。また成り上り者に利用される世間知らずの人の良い人物のような面も見せる。しかしやがて王は、政治的合理性を具え、依存性を脱却して自らの意志と判断力と行動力を持った強いリーダーシップを発揮するようになるとともに、宗教的にもローマから自立した栄光に輝く英国の礎を築き、かつ繁栄の未来を託す世継ぎを確保できた偉大な人物となる。

王自身が存命中に描かせた威厳に満ちた肖像画は、いわば、静的で完結した記録である。一方、テキストは、エリザベス一世の死とともにテューダー朝が終わり、それに続くスチュアート朝ジェームズ一世の治世が始まって10年になった時点で、つまり、およそ80～90年後の視点で、29歳～42歳にかけての实在の国王をあえて理想的に描こうとしているのである。したがって、その描き方には、ことさら豪華な衣装や道具立てを用いながら同時代の過渡性ゆえのバイアスが強力に機能するとともに、同時代の観客には周知であるにも関わらずテキストの表面上は抑圧された事柄や、エネルギーで猥雑な庶民の生活世界が、そのバイアスを相対化することもある。本稿の目的は、このようなヘンリー八世の理想化ないしは美化の劇的過程とその歴史的意味を考察することである。

なお、この作品に関しては、シェイクスピア単独作というよりもフレッチャーなどとの共作説が有力であるが、どの部分を誰が執筆したのかといった点では議論も多く⁽¹⁾、このような問題については、上述したような「時代の産物」という観点から、本稿では論考の対象にはしないでおく。

1

第一幕は、甥を連れたバッキンガム公がノーフォーク公に英仏両王による先の会見の様子を尋ねることで始まる。それは1520年6月7日から24日にかけてフランスのカレー近郊アンドレンの谷間で行われた英王ヘンリー八世と仏王フランソワ一世の間の盟約の披露宴であり、音楽の宴やレスリングや馬上槍試合など大饗宴が連日繰り返され、会場に設営された金糸銀糸をふんだんに使用したテント群や王侯貴族たちの衣装に因んで「金襴の陣」("Field of the Cloth of Gold")と名付けられた。

その絢爛豪華ぶりと若き両王の甲乙つけ難き勇姿がノーフォークから感嘆を持って語られるが、この行事全般を仕切ったのがウルジー枢機卿だとわかった途端、バッキンガムはこの枢機卿に対する日ごろの反感を剥き出しにしはじめ、彼を含めて三人が次々とウルジー批判を展開する。突拍子もないお祭り騒ぎの大饗宴のせいで貴族たちは大変な経済的負担を強いられて少なくとも者が苦境に喘ぎ、一方でその政治的成果はほとんどなく、むしろすでにフランス側から盟約違反の事件さえ起きているとのことである。

当時の国際情勢（オスマントルコに対抗するヨーロッパでのスペイン（神聖ローマ帝国）とフ

ランスの二大勢力によるにらみ合い)の中で相対的に弱小国であるイングランド⁽²⁾がスペインとの関係だけでなくフランスとの関係も強化していくという外交上の政策は当然ありうるとされる。この政策をウルジーが主導したのである。

しかし、18日間にも渡る大饗宴は、他国には強い印象を残したが、イングランドにとって得るところはほとんどなく、経済的にはむしろその負担を賄うための重税などにつながったというのが歴史的な評価であるだろう。そこで名門貴族たちが、外交問題でウルジーの差し出がましさを非難するもの自らは何もせず、このマイナス評価の責任を、もっぱら血筋の卑しい、成り上り者に押しつけているのである。言い換えれば、英仏首脳会談そのものの政治的意義の検証や王自身の責任や行動(ヘンリーがフランソワとのレスリング試合で不覚を取ってイングランド側が面目をなくしたとも伝えられている⁽³⁾)について、テキストの中では話題にもならない。

この開幕の場で示されるのは、要するに、名門出の有力貴族を代表するバッキンガム対王の威を借りた成り上りの実力者ウルジーといういわば権力闘争の構図である。両者が本格的に火花を散らしはじめようとする矢先、修羅場をくぐって成り上がってきただけに、戦略、戦術に長けた後者が口だけ威勢のよい前者をあっけなく打ち負かしてしまう劇的展開がその後に続くことになる。さて、先ず、敗者となるバッキンガムの人物像を歴史的に概観したうえで、この勝負の意味を考察してみよう。

2

この劇に登場するバッキンガム(1478-1521)とは、三代目バッキンガム公エドワード・スタッフォードのことで、その父である二代目バッキンガム公ヘンリー・スタッフォードが、かつてリチャード三世に謀反を起こして処刑され、爵位も廃されたが、ボズワースの戦い(1485年)でチューダー朝の祖であるヘンリー七世(1457-1509、在位1485-1509)がリチャード三世を倒して王位に就いた際、公爵位が新設されて三代目バッキンガム公として叙爵された人物である。彼はヘンリー七世の王妃エリザベス・オブ・ヨークの従弟(彼の母が王妃の母の妹)であるため、王にかわいがられ、7歳で公爵となった。ちなみに、この二代目はプラントジネット朝七代目エドワード三世(1312-1377、在位1327-1377)に繋がる家系を誇る。すなわち、父方の祖父は初代バッキンガム公ハンフリー・スタッフォードで、エドワード三世の末子であるグロスター公トマス・ウッドストックの孫に当たる。また、父方の祖母はアン・ネヴィルで、エドワード三世の四男ジョン・オブ・ゴントの孫に当たる。そして、母方の祖父はサマセット公エドマンド・ボーフォートでこれもまたジョン・オブ・ゴントの孫に当たる。このような名家の三代目は、その後、1495年にガーター勲章を受け、1509年のヘンリー八世の戴冠式には戴冠役を務め(ちなみにこの戴冠の時点でイングランドには、公爵は彼だけであり、侯爵としてドーセット侯トマス・グレイ、他に10人の伯爵、29人の男爵が存在していた⁽⁴⁾)。なお、このころノーフォーク公は存在せず、劇中のノーフォーク公トマス・ハーワードは年齢からみて同名の三代目と思われる

が、作者が混同したものであろう.), 1515年には大司馬(Lord High Constable of England = 現在は戴冠式の時だけの儀礼官であるが当時は国王軍の司令官)に就くが、この劇で扱われているように1520年に反逆罪で逮捕され、翌年処刑されている。なお、ヘンリー七世の政策もあってバラ戦争終結以前の旧封建貴族たちの多くがもはや存在しなくなっているため、彼の地位は特筆されるものである。

かくして、このバッキンガム公はイングランドの超名門貴族の一人であり、先代の王ヘンリー七世時代から政権内での極めて有力な地位を占めてきたと思われる。しかしながら、現国王ヘンリー八世にしてみれば、自分より13歳年上で、宮廷内の人脈も強く、一般大衆に人気を博している(2. 1. 50-53)、しかも王家の血をひく人物が、疎ましい存在として意識されることも徐々に多くなっていくことはなかったであろうか?そしてそうすると、バッキンガムの影響力を弱める策を講じることは、王の意思でもあったとは考えられないだろうか?

第二幕第一場の街路上で紳士1が紳士2に、公爵陥れを画策したのはウルジーに違いないとしたうえで、その政治的策略の一端としてキルデア伯のアイランド総督罷免とその後任にすぐバッキンガムの舅であるサリー伯を据えて公爵を孤立させたという謀略説を紹介して、枢機卿を批判している(2. 1. 41. 44)。しかし、このような政治的策動は、王の与り知らぬところでウルジーだけの魂胆からできるものであると言えるのだろうか?

バッキンガムが反逆罪で逮捕される決定的な理由となる公爵家の監督官の証言が、王の要請で再度確認という形で、明らかにされる。それを要約すると次のようになる。

- 1 公爵が口癖のように毎日口にして「万一王が世継ぎのないまま死ねば、なんとしても王冠を自分のものにしてみせる」ということを婿のアバガベニー卿に言い、さらに、「枢機卿に必ず復讐する」と断言するのを聞いた。
- 2 その王冠への夢を吹き込んだのは、彼の懺悔聴聞僧で、シャルトルーの修道士ニコラス・ヘントン。
- 3 今度のフランス行きに於ける王の身への危険についてのロンドン市民たちの危惧に対して、彼は、「その恐れはある」と即座に反応して、「あの修道士の予言は現実のものとなるかもしれない」とつけ加えた。
- 4 修道士は公爵家の神父ジョン・ド・ラ・カーに何度も接触を求め、この神父を通じて、公爵がやがてイングランドの支配者になるとの予言を彼に伝えさせた。
- 5 公爵は「王がこの前の病気で亡くなっていたら枢機卿とトーマス・ラベルの首はとっくに飛んでいた」と言った。
- 6 王の忠臣であったサー・ウィリアム・ブルマーを横取りしたとして王が公爵を咎めた後、彼は「その件でロンドン塔に送られるはめになれば、自分の父親がかつてリチャード三世に反逆し、殺害を試みたのと同じまねをするつもりでいた」と言っていた。

これらの証言はすべて、バッキンガムを陥れるためにウルジーが仕組んだ偽証だとすれば、単なる私闘の経緯の中で公爵が敗れた勝負の方向を決定づけた一つのエピソードぐらいで片づけら

れておしまいかもしれない。しかし、二人の有力者の間に国王ヘンリー八世を置いてみると別の面が見えてくる。

このころのヘンリー八世には王妃キャサリンとの間に6人の子が生まれようとしたものの、生き長らえたのは王女メアリーのみで、7歳年上の王妃は何度か流産や死産を経た身体ですでに30代半ば近くになって、なおも男子誕生を期待するのは困難と思われたであろう。また、この作品が執筆された1613年の時点では、ヘンリー八世が世継ぎの王子切望のためさらに5人の王妃を迎えることになりながら、成人して国を治めていくに足る丈夫な男子に最後まで恵まれなかった⁽⁵⁾のは周知のことである。世継ぎの問題は、時の国王にとって政治問題にほかならず、それが期待できる可能性がますます薄くなっていくにつれ、焦眉の、最大の懸案である。しかもこの作品が書かれた10年前の1603年にはエリザベス一世が生涯独身を通して69歳で死去しており、その晩年は王位継承問題がこれまた極めて重大な政治問題であったことが同時代の人々には容易に想起されただろう。

家柄、血筋において申し分なく、先王の代から宮廷内で重用されてきた有力者のバッキンガムが抱いたとされている王冠への夢は、世継ぎ問題を意識せざるを得ない王にとっては、為にする絵空事ではなく、とても許すことのできない、生々しい現実性を帯びた切実な悪夢ではなかっただろうか？フランス遠征の折や病気にかかった際の王の死を願ったというこの有力貴族の姿を王自らが想像し、その危惧⁽⁶⁾を取り除こうとすると考えるのは無理なことではないだろう。

戴冠して11年が経ち、父王がバラ戦争を終結させてイングランドを統一して創始したチューダー朝をより強固にするべく使命を持ったヘンリー八世は、いわば乗り越えるべき父の時代の象徴のような存在であるバッキンガム（その王朝創始に自らの命をかけて貢献した父を誰よりも誇りとし、折に触れそのことを話題にする）をまずは排除しようとするのである。したがって、証言の第6番目として、王の忠臣を公爵が横取りしたことに對する王の叱責への強い反発、具体的には、かつて父が起こした反逆事件にならった事件さえ起こすぞという公爵の覚悟があげられているのである。この横取りの件をめぐるいきさつは王も認めるところであり、王と公爵の間である種の軋轢があったことは間違いない。

ところで、証言の第2番目で言及されているシャルトルー修道会の修道士ニコラス・ヘントンは何者だろう？前場のバッキンガム逮捕時に明らかにされる王の令状によると、他にリストに載っている逮捕者は、モンタギュー卿、公爵の懺悔聴聞僧ジョン・ド・ラ・カー、公爵の秘書官ギルバード・パーク、さらにシャルトルーの修道士ニコラス・ホプキンズとなっていた。そしてその後大逆罪裁判の様子が街路で語られる場があり、目撃した紳士1の話によると、法廷に呼び出されて公爵の有罪のための証言をしたのは、公爵家の監督官、秘書官のサー・ギルバード・パーク、懺悔聴聞僧のジョン・カー、それに修道士ホプキンズであった。改訂新ケンブリッジ版の注釈にあるように⁽⁷⁾、修道士の名前はニコラス・ホプキンズ・オブ・ヘントンのというのがフルネームであると思われる。

ここで重要なのは、大逆罪の陰謀の発案者がこの修道士だということが強調されていることで

ある。三度も出された名前がそれぞれ少しずつ異なっているのは、作者あるいは共作者によってなされた齟齬というよりは、むしろ、そのことでかえってこの修道士の名前が印象付けられる効果になっていると思われる。ルター派を始めプロテスタントが徐々に浸透しつつある16世紀ヨーロッパにあって、カトリックの修道会の修道士はローマ法王に忠誠を誓い、神の教えを実践し、かつ広める使命を帯びた集団の一員だったのではないだろうか。ここで言及されているシャルトルーとは、ドイツ出身の11世紀に活動した聖者ケルンのブルーノが創設したカトリックのカルトジオ修道会の、フランスにあるグランド・シャルトルーズ修道院のことと思われる。そんな彼が、懺悔を聞きながら公爵に例の予言を吹き込みつづけたというのである。

そして彼と共に逮捕され、法廷でバッキンガムに不利な証言をしたのが、公爵家内の秘書官と懺悔聴聞僧であって、要するに彼らもまた聖職の身である⁽⁸⁾。すると、この陰謀は修道士を通してローマの意向を受けたものという可能性も考えられる。彼らがみんな陰謀の露見後そのような証言をしたのは過酷な拷問の結果なのか、それとも別の理由からなのか、テキストはこの点にまったく触れていないが、いずれにしろ、ヘンリー八世とローマとの関係にすでに隙間風が吹きつつあることを観客に感じさせるものである。

はじめは熱心にカトリックを信奉していたと思われたヘンリー八世⁽⁹⁾は、やがてローマと離婚問題で衝突し、1533年には、法王クレメンス七世から破門され、その結果バチカンから離れて自立した英国教会を作り、自らその最高位におさまり、聖俗両方の頂点に就くことになる。そしてその際カトリックを信奉する者を弾圧し、ローマの出先機関として英国内の修道院を徹底的に破壊していったのである。

3

一方、トマス・ウルジー（1475-1530）は、華麗な名門貴族の血筋を誇るバッキンガムとは対照的に、一代で自らの力でのし上がった人物である。「牛殺しの倅」（1. 1. 120）、「イブスウィッチの平民野郎」（1. 1. 138）と罵られるように、イブスウィッチの家畜食肉業者の息子であったようであるが、オックスフォード大学をわずか15歳で卒業した秀才であった。この時期の卑しい生まれの者にとって出世の最善の道としての選択肢は宗教界に身を置くことであったと思われる。1498年に司祭に叙任され、ウィンチェスター司教リチャード・フォックスの保護を受けるようになり、そしてヘンリー七世の宮廷付司祭になった。やがて、即位して間も無いヘンリー八世に認められてすぐ枢密院議員となり、1514年にヨーク大司教、翌年の1515年9月には枢機卿となった。この年の12月にはまた、先王時代から重用されていたフォックスの後任として大法官にもなっている。

外交政策においても、彼は大きな役割を果たしている。1513年のフランス遠征の成功に大きな貢献をし、すでにふれたように、当時の国際情勢を踏まえて、いわばパワーポリティックスの調停者としてイングランドの国際的地位の向上に努力し、オスマントルコに対抗すべく英、仏、

西、神聖ローマ帝国、教皇領の間で1518年のロンドン条約（Treaty of London）を成立させ、1520年には、第一幕第一場で言及されている、いわゆる「金襴の陣」をプロデュースして、英仏講和条約の締結を主導した。

他方で、彼は、その一代で大立者になっていく過程で、相当強引な手法を駆使したであろうことは想像に難くない。そして手に入れた地位と財力は自らの大豪邸ハンプトン・コートやロンドン公邸ヨークプレイスに象徴され、その贅沢ぶりと自力で出世した者特有のあくの強さや傲慢さが、名門貴族たちの怒りと憎悪の衝動を馭り立てることになった。

第一幕第一場で、その怒りと憎悪を代弁するバッキンガムが、彼の罪を並べ立て、さらに私利私欲のため王国の名誉を売買する謀反人として激しく批難するさなか、その本人自身が通り掛かる形で現れる。権力の象徴である国璽を納めた袋を捧げ持つ侍者を先に立て、数人の護衛と、書類を持つ二人の秘書官を伴って、これ見よがしの登場である。その書類はバッキンガム家の監督官が主人を訴え出ている調書であること、そして訴人本人も出頭の用意ができていることを、ウルジーは、わずか5行の台詞で、聞えよがしに確認する。ここは公爵と枢機卿が直接顔を合わせる唯一の場であるが、お互いことばを交わすことなく、ほんの一瞬敵意に満ちたにらみ合いの火花が散って左右に分かれる。しかしながら、ウルジーの方が、権力闘争の舞台では、役者が一枚上であり、この直後公爵は甥と共に大逆罪で逮捕される。

第二場のはじめのト書きによると、王宮の会議室に、「コルネットの吹奏。王ヘンリー八世が枢機卿の肩によりかかって登場。貴族たち、サー・トマス・ラヴェルがあとに続く。枢機卿は玉座の右手に席を占める。」と指示されている。観客はウルジーが王から絶大な信頼を得ていること、王に次ぐ権力者であることをまざまざと見せつけられるのである。王が、開口一番、バッキンガムの陰謀事件に関しての彼の適切な処理を称え、命の恩人として感謝のことばを述べる。ウルジーは、自分の存在をあからさまに否定する急先鋒を抹殺することと、そのことによって王の信頼をさらに強化するという二重の目論見を見事に達成し、今や王の意思さえ左右するほどの、権勢の絶頂にあるように見える。

しかし、例の陰謀事件についての証言をさせようとする矢先に、枢機卿にとってはやや頭の痛い問題が提起される。すなわち、対仏戦費をまかなうためとして全財産の6分の1を徴収するという重税策⁽¹⁰⁾による民衆の窮状の訴えと、その破棄を求める請願が行われ、さらに王の関知しないこの重税を課した張本人はウルジーだと王妃が責め立てるのである。王はさすがにこの税の取り消しと、反抗した者への赦免を命じるが、ウルジーは、黒を白と言いくるめるしたたかさを発揮して、この王命を取り成したのは自分だと民衆に噂を播くように彼の秘書官に傍らで指示する。この傍伯は国政を牛耳る彼に対する観客の反感をまねくのにも効果的な劇的技法である。したがって、このように狡猾であくどい手口を見せつけられると、彼による様々な否定的所業や策動が、その真偽はともかく、噂というかたちで観客の心に残る。

第二幕第一場に登場する二人の紳士が、バッキンガム裁判の様子を紹介した後、公爵を陥れる画策をしたのはウルジーに違いないと言う。その根拠として、すでに公爵の娘婿であるサリー伯

が新たなアイルランド総督に任命されて官邸から遠く離れた地に追い払われたことがウルジーの政治的策略の一手だったこと(2. 1. 40-49)を指摘する。

その場の後半では、さらにウルジーの策動の例があげられる。すなわち、噂となっている王と王妃の離婚問題で、これは、トレドの大司教にしてもらえなかったことでカール皇帝に仕返しをしようとしてその伯母にあたる王妃追い落としを謀った、ウルジーの差し金によるもの(2. 1. 160-166)とする。たしかに、ウルジーは離婚を画策したようであるが、その狙いは、もはや世継ぎの男子を期待することが困難に思える中、むしろスペイン王であり神聖ローマ皇帝であるカール五世の脅威を削ぐためヘンリー八世とフランス王の妹との婚姻による対仏関係強化を計ることであり、その上でその功績によるさらなる自分の栄達をもくろむことであったと思われる。しかし、もっぱら個人的な恨みを動機にする巷の世話を紹介しながら、テキストはとりあえずウルジーの性質(たち)の悪さを我々に強く印象付ける。(実は、王自ら離婚を模索する中、アン・ブーリンを見染めて、キャサリンとの別れを決断し、その処理を大法官であり教皇特使でもあるウルジーに依頼したという真相がやがて明らかになる。)

ウルジーの横暴ぶりを物語るエピソードがもう一つ挿入される。第二幕第二場のはじめに宮内大臣が手にした手紙には、「彼が所望していた数頭の若くて立派な北方産の馬が、国王を除けば全国民に優先して意志を通す権利があるという枢機卿の命令によって、すべて没収された」ということが書かれてあった。この手紙を読みあげた宮内大臣は、「枢機卿のやりそうなことだ。馬はくれてやろう、/なにもかも手に入れずにはおかぬ人だ。」(2. 2. 8-9)と吐き捨てるように言う。しかし、この大臣は、以前、枢機卿主催で開催されるヨークプレイスでの盛大な宴会についての話題の中で、逆にウルジーの気前の良さを他の者と共に称えていた。

ラヴェル あゝの枢機卿は気まへのいい心をおもちですね。

大地のようにゆたかな手で、あまねく恩恵の露を
降り注いでくださいます。

宮内大臣 たしかに高邁なかだだ。

そう言わぬのは、よこしまな心をもつもののみだろう。(1. 3. 55-58)

しかもこの大臣は、この宴会の幹事役の一人でもあり、枢機卿の意向に忠実であるように見えた。そんな彼がウルジー評価を、その物欲に関して、180度変えてしまったのである。この物欲は後にキャサリンによっても示唆される「七つの大罪」(Cardinal sins)のひとつ「強欲」(covetousness)⁽¹¹⁾として認識されるものである。まさに聖職者としてあるまじき大罪である。

この後、ノーフォーク公とサフォーク公も加わってウルジー批判が繰り返される。話題は、苦悩する王の様子であり、その苦悩の原因として離婚問題が指摘される。これは、しかし、先ほど述べた前場のスペイン王への枢機卿の個人的恨みといったような市井の噂とちがって、フランス王の妹との政略結婚を意図するウルジーが、義理の姉と結婚したことに関わる王の良心を激しく

揺さぶり、その痛みを取り除くために王に、20年も連れ添いひたすら愛を捧げてきた王妃と離婚するよう画策しているというものである。ここでもまた、進行する離婚問題はウルジーの策動の結果に他ならず、まるで、王妃のみならず王もまた被害者のように扱われている。「神が王のお目を覚ましてくださるといいが、長いあいだ / あの悪党にたいしては、眠っていたお目を。」(2. 2. 40-42) という宮内大臣の台詞は、王はむしろ騙されていたと言わんばかりである。

さらに、ウルジーの腹心と思われるガードナーが国王の新秘書官に任命されていることも明らかになるが、その前任のペース博士はウルジーの不正に楯突いたことで、不遇の身に落とされ、その後狂死したとされる⁽¹²⁾。

かくして、悪僧ウルジーの恐るべき力と彼に頼りきりな、あるいは、むしろ言いなりのヘンリー王の姿が強く印象付けられる。

4

ただし、このような二人の関係についてのイメージが揺らぐ契機になる箇所も一瞬見える。宮内大臣が、王は「おそらく、兄上の妻であられたお妃との御結婚が / お心にかかっておられるのでしょ。」ということに対してサフォークが「いや、ちがうぞ、 / お心にかかっているのは、別のご婦人だろう。」(2. 2. 15-17) と傍白で観客の意識に茶々を入れている。すでに第一幕第四場で、ウルジーが栄えあるホストとして主催した華やかなパーティーへ余興がたら外国の賓客に変装して闖入した王がアン・ブーリンをみそめていたことが思い起こされ、キャサリンとの離婚は王の意思であって、ウルジーの思惑通りではないことが解る。権勢をほしいままに牛耳ってきた横暴で陰険な成り上りのウルジーのイニシアティブに、ほんの少しの陰りが見え始めたのである。

第二幕第四場の離婚裁判では、そのことが顕著になってくる。ブラックフライヤーズの大広間ではトランペットとコルネットの厳かな盛奏のなか、王と王妃、そして二人の枢機卿をはじめ司教たちや、貴族たちがそれぞれ順々に所定の席を占め、いかにも仰々しい儀式が粛々と進行し、王国と教会の威厳が誇示される。しかし、ウルジーが「ローマ法王よりの訓示が読みあげられるあいだ、 / 一同静粛にしているよう」(2. 4. 1-2) 求めた瞬間、王が、あらかじめ布告してあるので読みあげる必要はないとして、この手間を省かせている。こうして王は議事進行の出鼻で、自らの主導権を主張するのであり、かつて厳かに王宮会議室に登場する際にその肩を貸したウルジーの権威及び彼が象徴するローマの権威がもはや絶対的でないことをうかがわせるのである。

王妃は離婚される筋合いはないと弁明し、ウルジーを王と自分の仲を割こうと突き付けた張本人だと断じて、彼に対して裁判官忌避を申し立てる。そして彼の反論を拒否して、結局ローマ法王に上訴すると言って一方的に退出してしまう。これまたかつてウルジーが王宮会議室で例の6分の1税問題で王妃に追及されたことを思い起こさせるが、その時の彼は、黒を白と言いくるめる狡猾で、したたかな悪党ぶりを観客に印象付けた。しかし、今回の彼は、潰された面目の回復

を王に訴えるのみである。王がウルジーの潔白を断言してやることでこの場を収めるが、もはや彼はウルジーに頼るといふより、頼られる存在であることが見えてきた。二人の関係は逆に転じ始めたのである。

飛ぶ鳥を落とす勢いであった枢機卿の力は、実は、王の支えがあって初めて成り立つものであった。第三幕第二場になって、彼が密かに蓄えた莫大な財産の全目録と、王とアンの結婚阻止のため例の離婚問題の進展を止めるよう要請する法王宛の彼の手紙がたまたま王の手に渡ってしまふ。反ウルジー派の面々によって、国事における王権を蔑ろにする彼の越権行為なるものが此所を先途と並べ立てられ、ついに彼は失脚するが、その時の心境が次のように語られる。

この世のむなしい栄耀栄華よ、おれはおまえを憎む、
おれの心はいま別の世界にむかって開かれたのだ。ああ、
王侯の寵愛にすがって生きる人間のなんとみじめなことか！
われわれがあこがれ求めるほほえみ、王侯たちが見せる
あの甘い笑顔と、彼らがくだす破滅とのあいだには、
戦争や女が与える以上の苦痛と恐怖がある、そのあいだに
落ちこむものは、地獄に落ちるルシファーのように
二度と復活する希望はないのだ。 (3. 2. 365-372)

王の甘い笑顔が永遠に続くと思ひ込み、それを頼りにうめぼれて生きてきた自分の生き方が反省されている。墮天使ルシファーは「七つの大罪」のうちの最悪の高慢 (pride) によって地獄に落ちたのであり、それに喩えて、神に仕える高位聖職者のウルジーが自らを断罪する。王が見せる甘い笑顔とその後にくだす容赦のない破滅そのものは無常の不条理として受け入れるのみである。王その人を怨むことは決してない。

このことは、しかしながら、何もウルジーに限ったことではない。以前の刑場に連行されていくバッキンガムの台詞 (2. 1. 86-94) にも、後の臨終の床にある元王妃のキャサリンの台詞 (4. 2. 160-164) にも、王への非難めいた言葉は一切なく、ただ王への気遣いと祝福のことばだけがある。

5

離婚問題は、市井の噂やキャサリンが主張するような、ウルジーの策謀により生じたことではなく、というより、実は、ウルジーに係わりの無いところで、自分自身で感じた「良心 (conscience)」の呵責からくるものであるとして、王がその経緯を語っている。

すなわち、娘メアリーとオルレアン公との縁談が不首尾に終わったのは、亡き兄の妻と結婚したことに鑑み、フランス側から娘の嫡子としての正当性に疑念が寄せられたことからであり、こ

のことが王の "conscience" を烈しく苛んだ。そして振り返れば、メアリー以外の5回の懐妊はすべて失敗に終わり、世継ぎの王子の望みが断たれてしまったのは、旧約聖書レビ記 18-16:「あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることになる。」(13)の禁忌を犯したことによる神罰だと受け止めるというのである。要するに、王は20年以上も忌むべき不正な結婚を続けてきたということになる。ヘンリー七世の長男アーサーはわずか2歳のとき(1489年)、これまたわずか1歳のキャサリン・オブ・アラゴンと婚約し、14歳になった1501年10月に結婚式をあげたが、六ヶ月後に病死してしまい、残されたキャサリンは次男のヘンリーと婚約して、1509年に結婚する。この時には、スペインとの関係を考慮せざるを得ないヘンリー七世が教皇ユリウス二世の特別な許可を取り付けたのである。今ヘンリー八世はこの問題を自分から蒸し返して、つまり、この結婚そのものがそもそも無効なものだと主張しているのである。

ところで、この "conscience" という語はテキスト中全部で22回使用されている。その内4回(2. 1. 50, 3. 1. 30, 5. 3. 34, 5. 3. 39)は "O' my conscience" といったような単に強調の意味を表す常套的な言い回しの一部である。さらに5回(3. 2. 327, 3. 2. 380, 3. 2. 397, 5. 1. 24, 5. 2. 74)は「公正な判断をする正しい心」としての「良心」を指す。もう1回(5. 2. 101)は「悪事をとがめる良心」を表すが、この場合は、この「良心」を持ちあわせない人物に対する軽蔑が込められて使われている。そして別の1回(2. 3. 32)は、「やわらかいしなやかなこころ」("soft cheveril conscience")として、本来の淑徳が打算で柔軟化するという皮肉を示唆する。そして9回(2. 2. 16, 2. 2. 26, 2. 2. 73, 2. 2. 141(ここでは2回繰り返し), 2. 4. 167, 2. 4. 179, 2. 4. 197, 2. 4. 200)は「自分自身を責める宗教的罪悪感」の意味であり、すべて劇前半の第二幕に集中しており、王の離婚への動機づけになる。ただし、その第二場で触れられるはじめの3例は、前述したように、ウルジーが自身の利益のために王の耳に入れたとされる推測のものであるが、続く繰り返し2例は王自身のことばで語られており、この推測はその第四場で王自らの説明によって覆されることになる。結局これらはみな、もともと「良心にかけて」が転じた常套句も含めて、善なる正しき心の問題に関わったことばである。しかし、残りの2回(2. 2. 16(の後半), 4. 1. 47)は「アンの魅力にひかれる王の心」の意味であり、王が必ずしも20数年前のタブーに触れる良心のうずきにずっと苦悩するのではなく、むしろ世継ぎをもうける可能性を秘めた女の新鮮なセクシュアリティへの期待をいだいていることを表している。22回中2回というわずかな率であるものの、同じことばの精神的・高邁から肉体的・卑俗への意味作用における価値逆転が試みられている。要するに、この頻出する "conscience" という語は、いずれにしろ、王の離婚への執念に直接的、間接的に呼応するものになっている。

王の説明によると、彼の "conscience" の苦しみを治してもらうには国中の優れた聖職者や学者たちの意見に頼らねばならず、そのことを最初にリンカーン司教に相談したところ、裁判による決着の提案があり、カンタベリー大司教(この時点ではウィリアム・ウォーラム)にその手続きを取ってもらった。そして、出席した聖職者全員の事前了解を得、さらに各人から署名捺印の同

意書まで取ってあった。まさに、王妃との離婚は、ウルジーの入れ知恵ではなく、王自らの思いからであった。したがって、この裁判は王によって用意周到に準備されたものであったのである。それで王妃が途中退席してしまった結果、もう一人の法王代理であるキャンピーアス枢機卿の裁判延期提案に王も不承不承同意するものの、傍白で次のように言う。

フン、枢機卿どもめ、
おれをいよいよあしらいおる。こおいった
ローマ流ののろくさい権謀術策はだいきらいだ。
博学なるわが腹心クランマーよ、早く帰ってくれ、
おまえが近づいてくることは、おれの慰めが、
やってくることなのだ。 (2. 4. 232-237)

王の信頼はすでにウルジーから完全に離れ、今や最も頼りになるのはクランマーだと言うのである。

第三幕第一場で二人の枢機卿がキャサリンのもとを訪れ、自ら離婚に同意するよう促すが、王妃に大悪人の裏切り者と非難され、結局、どうにか一任を取り付けるものの、彼らは王の意思を伝える単なるメッセンジャーの域を出ない役目を果たしただけであった。そして次の場になると反ウルジー派の貴族たちが王の不興を買った彼を此所を先途と攻め立てるが、その前に、王の離婚と再婚に関わる問題を話題にしている。すなわち、王はすでにアンと結婚しており、間もなく正式な二回目の結婚が公表される見通しであること、また前妃との離婚を強く支持し各国にその同意の根回しをした功績によりクランマーが新カンタベリー大司教に就任する予定であること。王は、まさに、ローマ流ののろくさい術策など信用せず、離婚・再婚という自ら設定した既定路線の上を一気に走ったのである。

王に重用される教会の人間として、クランマーがウルジーに取って代わったように見える。しかし、王とそれぞれの信頼関係の間には大きな違いがある。すでに述べたように、かつてウルジーの肩に寄りかかって王宮の会議室に登場した王の姿は、二人の間に存在する全幅の信頼性を印象付けたが、それは同時に、どこか未だ一人前でない王の依存性の強い表象とも解釈できた。しかし、今の王は、自ら思考し、評価し、決断し、実行する自立した人物として現れている。

第四幕第一場において、戴冠式を終えた新皇后アンの絢爛豪華な行列が慣例の順序に従って市民たちの前を厳かに進み、またその戴冠式そのものの見事な様子も紹介される。そして、第二場においては、結婚無効が正式に決まり、今や皇太子（ヘンリー七世の長男アーサー）未亡人となり下がったキャサリンがベッドに横たわり、黄金の仮面をかぶり華麗な衣装や装具を身に付けた6人の踊り手による仮面劇の夢を見た後、静かに息を引き取ってゆく。この幕全体は、こうして壮麗なページェントを連続させながら、去る者と来る者の見事な対比を劇的に示している。アンの戴冠式の行列見物にきた二人の紳士が久しぶりに出会って次のように言っている。

ベリー大司教がやがてイングランドの王位を継ぐことになる赤子、すなわち、エリザベス女王の名付け親になるということは、王国の未来がプロテスタントのもとで歩んでゆくということを意味する。かくして、ヘンリーは、自らの政治的な権威を誇示したうえに、カトリック勢力の油断のならない策動をも封じて、ローマと袂を分ったイングランドの新しい時代を切り拓くのである。

テキストは、したがって、劇の前半で、ナショナリズムを醸すことに貢献する事柄を様々な形で組み込むことを怠ってはいない。それらを箇条書きにあげれば以下ようになる。①国内に大変な経済的負担を強いた「金襴の陣」まで挙行して締結した英仏盟約がフランス側によって破られ、ポルドーで英商人の荷が没収される事態 (1. 1. 95-96)。②スペイン王でもある神聖ローマ皇帝カール五世によるウルジー買収疑惑 (1. 1. 185-190)。③フランスのシャルトルー修道会の修道僧によるとされるバッキンガムの謀反への扇動 (1. 2. 148-150)。④フランスかぶれの連中の異様な風習とその乱れた風紀取り締まりの布告 (1. 3. 1-35)。⑤離婚裁判開始時にローマ法王の訓示読みあげを王が省略させたこと (2. 4. 1-5)。⑥離婚裁判が延期になって、ローマ風の時間をかけるやり方に愚痴を言う王の傍白 (2. 4. 233-234)。⑦ウルジーがラテン語で挨拶するのをキャサリンが遮って、彼に英語で話すよう求めること (3. 1. 41-50)。⑧ウルジー失脚の理由の一つであるローマ法王宛での離婚裁定延期を求める秘密文書の露見 (3. 2. 30-33)。⑨ウルジー追及であげられる罪状の内、蓄財した莫大な財宝をローマ法王に贈って、国全土が破滅の危機にさらされるに至ったという事柄 (3. 2. 326-330)。

そして同時に留意すべきことは、テキストが、歴史上（つまり、この作品が書かれた1613年には周知の）カトリック信者としての自己の信念を最後まで貫いた二人の人物に、ほとんど触れることはないという点である。その一人、トマス・モアについては、失脚直後のウルジーによって、世間の噂の話題の中でわずかに語られるにすぎない。モアが後任の大法官に選ばれたことを紹介するクロムウェルにウルジーは次のように言う。

だがあの男もなかなかの学者だ、どうか末長く
王のご信任を得て、真実のために、良心に恥じぬよう、
職責をまっとうしてほしい。そして人生の旅路を終わり、
祝福されて永の眠りにつくときは、その遺骨の上に
大法官の庇護のもとにある孤児たちが涙を注いで
嘆くようであってほしい。 (3. 2. 394-399)

自分の後任の大法官に就いたばかりのトマス・モアを、学識豊かで、公平無私な立派な法律家として高く評価し、その職責の完遂への期待を表明しながら、ウルジーは、同時に、彼の惜しまれるべき死に言及している。大法官の職務の一つが孤児や精神障害者の保護であった⁽¹⁷⁾ことから、その職責に誠意をもって取り組んだ結果慕われ、惜しまれる人柄が予言されているのであ

る。要するに、王に頼って絶頂から奈落に落ちた自己の波乱に満ちた人生に比して、立派な大法官が立派にその職務を果たして生涯を終えることを期待すると述べているにすぎないように聞こえる。

ウルジーの失脚、すなわち、モアが大法官に就任したのは、1529年であり、その5年後の1534年にはイングランド宗教改革の完成を記する国王至上法（首長令＝Act of Supremacy）に断固反対した結果、彼は、反逆罪を問う査問会で有罪とされ、翌1535年に57歳で公開斬首の刑に処せられた、という周知の史実をテキストはあえて無視しているかのようである。しかし、われわれは、「王のご信任を得て」というところに、幾分アイロニーを感じないわけにはいかない。実際は、やがて彼が国家の在り様に関わる問題で「王の信任を失う」ことになる。ただし、このアイロニーのほころびを見せはするものの、テキストはカトリックの殉教者⁽¹⁸⁾としての彼の存在をほぼ完全に消し去っている。

テキストが無視する歴史上もう一人のカトリックの強固な信奉者はメアリーである。彼女について言及があるのはわずか二ヶ所にすぎない。その第1は王が王妃との離婚を考えるきっかけになった事柄を説明するくだりである。娘メアリーのオルレアン公爵との縁談にフランス側から彼女の嫡出性に関してクレームが付き、王自身と兄嫁であった女性との結婚が問題になった。つまり、既述したように、レビ記に反する婚姻は無効であり、その結果、その無効な結婚で生まれたメアリーは庶出と考えられるというわけである。

その第2は今や元王妃となったキャサリンが、自分の臨終に際して、まだ二十歳前の娘の養育を頼む主旨の王宛の手紙を説明するくだりである。この手紙では、その他に、長い間身の回りの世話をしてくれた侍女たちや召使いの男たちにも相応の処遇を願うことが記されている。これは、死に行く母親として、主人として、残される者たちをおもんばかる、いわば遺書のようなものであるが、しかし、どこか一般的な配慮の印象を受ける。というのも、固有名詞は一言も無く、とりわけ、気掛かりな娘の名は呼ばれない。

こうして、メアリーの名は、第1の個所で王の口からたった一度、しかもネガティブな文脈において、出るだけである。しかし、ジェームズ朝の観客が知っている彼女は、王がアンと出会うまでは、世継ぎの王女としてかわいがられていたが、やがて父である王に会うことさえ許されなくなり、腹違いの妹エリザベスの世話係を勤めさせられる屈辱を味わう。そして後にメアリー一世（在位1553-1558）として即位すると、彼女はプロテスタント勢力を肅正してイングランドをカトリックに戻すことに執念を燃やすことになる人物である。その犠牲者の一人は、火刑に処せられたトマス・克蘭マーであり、第五幕第三場の枢密院議会議場で王が、ガードナーと彼を和解させた時に、「カンタベリー大司教に意地悪してみろ、それでも彼は終生の友でいてくれる」（5.2.210-211）という世間の噂を引用していた。実は、この句はジョン・フォックスの『殉教者列伝』（1563）にあるもの⁽¹⁹⁾で、この劇の作者が後世の視点から挿入したものと思われる。

7

一方、アン・ブーリンは、1533年に王妃になってわずか3年足らずで斬首されることになり、その後様々な悪評（野心家で、傲慢で、気まぐれで、王の愛妾のひとりであった妹のメアリー・ブーリンに比べて美貌が劣り、王妃としての地位を確固とするために近親相姦まで犯して男子を産もうと試みた（これは、多分に処刑の理由づけにされたように思える）などが語り継がれる⁽²⁰⁾）ことになる。しかし、この作品に登場する彼女は、清純で、つつましく、王に永く愛され続け、国民にも絶大な人気のある若くて美しい女性として現れているように見える。

王が彼女を初めて知るの、彼が、ウルジー主催の晩餐会に、外国の王室からの使節という触れ込みで仮面をつけて羊飼いの扮装で乗り込んで、ダンスを踊る際である。彼は彼女に一目ぼれしてその手を取る。この時の彼女は、優雅に踊るだけで、一言も口を利くことはない。そこで彼女はロチフォード子爵トマス・ブーリンの娘で、王妃付きの女官のひとりとして宮廷に上がっている女性だという素性があかさされる。物静かで美しく、宮廷ダンスをたしなみ、家柄も一応貴族であることで、王が見染めるのにふさわしい女性と確認されるのである。

しかし、王が登場する直前に彼女は、すでに観客の前に姿を表し、声を聞かしてくれている。着飾った紳士淑女たちが席について華やいだ宴がはじまり、老人ながら座持ち役のサンズ卿が、女性たちの間に割って入り、アンに軽口をたたいて戯れる箇所がある。

サンズ では、失礼しますよ、ご婦人がた、
少々乱暴な口のききかたをしても許してください、
父親譲りなので。

アン するとお父様は狂暴なかたでしたの？

サンズ 狂暴も狂暴、特に恋にかけては狂気の沙汰でした、
と言っても咬みつくような狂暴さではなく、一息で
二十回キスするようなものでした。このように。（アンにキスする）

—— 中略 ——

サンズ 赤葡萄酒がご婦人がたの頬を
美しく染めさえすれば、すぐおしゃべりになりますよ、
男どもが口をはさむ隙もないほど。

アン おすきなのですねえ、
ご冗談が。

サンズ いや、冗談ではなく、キスも好きですよ。
まずは、お姫様、あなたのために乾杯しましょう、
この杯にこめた私の心は――

口も開けないうちに餌を与えられるとは！

(2.3.81-88)

人にぺこぺこしながら、16年も宮廷に仕えて、何ら出世することの無い自分に比して、アンは一瞬にして最高の地位を得ることになるが、その秘訣は、彼女のセクシュアリティそのものだというのである。「新米のお魚さん」の原文は”fresh fish”で、このことばには「若い娼婦」の意味があり、最後の「口も開けないうちに餌を与えられる」(“have your mouth fill'd up before you open it”)には性的意味が込められていることは明らかである。

あれほどかたくなに「処女の操にかけて王妃になんかならない」と口では言っていたアンは、間もなく(第三幕第二場で)明らかになるが、王とひそかに結婚し、やがて懐妊することになる。こうして、テキストはアンの本音とそれを包む建前の両方をまことに巧妙に描出していることになる。

第四幕第一場では、皇后戴冠式を終えた行列が伝統的次第に則って秩序整然とウェストミンスター街の街路を横切っていくのを見ながら、二人の紳士が参列の名門貴族たちの名を次々とあげる中、華やかな祝事の大ページェントが展開される。

当然にもそこでの注目的は、この上なく美しい王妃アンである。彼女に目を留めた紳士2は次のように感嘆の声を出す。

あんな美しい人はいままで一度だって見たことがない。

いやあ、この魂にかけて言うが、あのかたは天使だよ、

王は全インドの富をその手にされたわけだ、いや、

それ以上だろう、あのご婦人をお抱きになるときは、

王が心を惑わされたのも無理ないな。

(4. 1. 43-47)

無垢な天使のように美しいが、生身のセクシャリティーも魅力なのである。そして、戴冠式を実際に観てきたばかりの紳士3が、式に臨む彼女の様子を次のように言う。

貴族、貴婦人がたが、きらびやかな潮の流れとなって、

お妃様を聖歌隊席の定め場所までお連れすると、

引き潮のように遠くへ引きさがった。お妃さまは

しばらく、そう、三十分ほど、その豪華な玉座で

お休みになっておられたが、そのあいだ惜しみなく

美しいお姿を民衆の目にまともにもさらしておられた。

いやあ、あんなにきれいな花嫁さんは、この世が

はじまって以来のものだろう。だから、民衆が

その顔をはっきり拝見できたときの騒ぎときたら、
まるで嵐に会った船の帆綱だ、それぞれが高く低く
さまざまな調子の大声をあげたのだ。と同時に、
帽子も上着も、胴着までもほうりあげた、 (4. 1. 62-73)

30分も民衆の前に身をさらす彼女の姿は、どこか艶かしく、欲情をそそるよう媚を売る娼婦のそれに似ていないだろうか。しかも、「あんなにきれいな花嫁さんは、この世がはじまって以来のものだろう。」という訳文の原文は "she is the goodliest woman that ever lay by man." (「男と寝た最高の女」) であり、アーデン版(第3版)の編者が言うように、この描写にポルノグラフィックなトーン⁽²¹⁾を聴き取ることは容易である。さらに、このようなアンの性的魅力に興奮した連中が歓声をあげて、居ても立っても居られず着ている物をすべて脱ぎだしたというのである。したがって、その後戴冠式を終えた彼女が前述した第一幕第四場の王と初めて出会った宴が催されたヨークプレイス(ウルジー失脚後は王の所有となってホワイトホールと改名)に戻って行ったというのも、暗示的と言えよう。つまり、王の心を惑わした彼女のしたたかさが皮肉な形で思い起こされるのである。

8

第五幕の第一場で王女エリザベス誕生が伝えられ、第二場の終わりで克蘭マーが名付け親に指名されてその洗礼式が予告され、最終場でその洗礼式が厳かにかつ華麗に執り行われ、彼女のもとでイングランドの輝かしい未来が予言される。そして彼女の亡き後にも新たな名君が生まれさらなる名声を得て不動の玉座に燦然と輝くだろうとまで言われる。かくしてヘンリー八世の自己と王国の両方の自立と繁栄への思いはついに実を結ぶ。

しかし、テキストは、いわば公式の歴史を相対化する視点も挿入する。庶民の喧騒と猥雑な溢れんばかりのエネルギーがその最終場直前の場で爆発する。場面は王宮の前庭の広場という設定で、舞台奥で人声と騒音が聞こえる中、門衛とその手下が、洗礼式後に出てくる王侯貴族たちを見ようと次々と押し寄せる野次馬連中を、棒を振り回して、必死に追っ払おうとしている。この二人によると、このごろつきどもは「王宮を見世物小屋⁽²²⁾、とでも思って」(5. 3. 2) おり、洗礼式をぜひ見たいというもの「お祝い用のビールとケーキが目当て」(5. 3. 9) である。さらに、門衛は「妙なインド人⁽²³⁾がでっかい道具をぶらぶらぶらさげてやってきたっていいのか？ 女どもがこんなに押しかけてきたのは？ まったく、なんてこった、門前に黒山をなすこの色気ちがいどもは？ …… 今日一日の洗礼式がもつて、一千人の赤ん坊が洗礼を受けることになるだろうぜ、父親も名付け親もなにかもそろっているんだからな。」(5. 3. 31-36) と卑猥な話にもっていく。そして、手下が、焼けるような赤鼻の男を殴りつけようとして、傍にいた小間物屋の女将を殴ってしまい、女将の店の者が40人も棍棒を手にとめてきたところを、なんとか持ちこたえている

と、いきなりその後ろから餓鬼どもが投石をはじめお手上げになってしまったという、面白おかしく誇張した与太話を披露する。この話に、門衛も、彼らは芝居小屋でリングなどを投げつけて騒ぎを起す手合いで、あるいはタワー・ヒルの処刑場に集まる野次馬かライムハウスの波止場⁽²⁴⁾にたむろするごろつきぐらいしか太刀打ちできない連中であり、監獄にはその仲間がいる、と応じる。この場では、華やかな王侯貴族たちの表の世界とはかけ離れた、猥雑でエネルギーで胡散臭いが生活感あふれるロンドンの裏の世界が活写されている。

この場は、従来、次の場への準備のために演劇技術上の必要性から挿入される幕間の道化狂言の二人芝居のような位置づけをされて、しばしばカットされる⁽²⁵⁾。しかし、この裏の世界は、表の世界のパロディーとして重要な異化の視点を提供してくれる。熊いじめの見世物小屋に群がるごろつきたちは、失脚していくウルジーを此所を先途に寄ってたかって責め立てる貴族たちを想わせる。そして、精力絶倫のいちもつを目指して押しかける女たちの挿話は、数多くの女たちが王の愛顧を求めて近づき、アンだけでなく、さらにもう四人の女たちが王妃になっていく周知の事実とつながる。また王女の厳肅な儀礼である洗礼式そのものが、庶民の卑俗な、しかし同時に豊穡な、子作り＝セクシュアリティ（性現象）に格下げされる。また、タワー・ヒルの処刑上に集まる野次馬たちは、処刑そのものを一種の娯楽の対象とみなす連中である。刑場に連行されてゆくバッキンガムの後についていく市民たちは、公爵に同情して涙する者だけとは限らないだろう。歴史的に言えば、トマス・モアやクロムウェル、アン・ブーリン、さらには後の王妃のひとりキャサリン・ハワードなど、ヘンリー八世治下で多くの処刑が行われ、その都度刑場には多くの娯楽を求める野次馬の歓声があがった⁽²⁶⁾。

まとめ

この劇は、上演史⁽²⁷⁾を顧みれば明らかであるが、大がかりな装置と華麗な衣装と優美な音楽を特徴にしたページェントや仮面劇を盛り込んだ豪華絢爛たる舞台が、それぞれ時代の風潮や嗜好に応じて作り出されてきた。たしかにそのような舞台作りに格好の場が多くある。前半では、まず、「金欄の陣」の紹介がある。その後、王宮で開催される荘重な御前会議、ヨークプレースの大広間で繰り上げられる王のサプライズ出席の仮面舞踏会、ブラックフライヤーズの大広間での王侯貴族、高位聖職者たち列席のもとで開かれる離婚裁判などが催される。次いで後半には、アンが戴冠式を終えて引き上げるウェストミンスター街の街上で壮麗な大行列、キンボールトン城で臨終の床にあるキャサリンが見る幻想に現れる6人の精霊たちによる黄金の仮面劇、そして、王宮での位階と秩序の荘厳な慣例に則ったとどめのエリザベス王女洗礼式が、次々に舞台の上で繰り上げられる。これらの場面に、観客は、目を見張り、息をのみ、次いで、大騒ぎして拍手喝采するかもしれない。言いかえれば、観客はこれらの非日常的な大興奮の体験を半ば羨望の中で満喫するのである。

しかし、一方でこの劇はやはり権力の所在をめぐる歴史劇である。ただし、他のシェイクスピア

アの英国歴史劇とは異なって、時代の政治的、宗教的体制の過渡性を色濃く反映し、そしてそれゆえに、その体制の正当性をことさら壮大な儀式・儀礼で強化しようとする特徴を持っている。

ランカスター家の系譜にあるリッチモンド伯ヘンリー・テューダーがボズワースの戦い（1485）でヨーク家の国王リチャード三世を破り、ヘンリー七世としてテューダー朝を開き、星室庁などを利用して反対派の諸侯を抑圧しながら王権強化を図るが、その本格的な統一国家体制の基盤はその息子によって築かれる。18歳で即位したヘンリー八世は、はじめは、父の代からの有力な貴族や聖職者に実質的な権勢を好きなように揮わせるものの、やがて、彼らの相互の反目を利用して次々と失脚させながら王権を強固にし、さらに、自らの離婚・再婚問題を契機にローマ法王と袂を分って英国教会を創設し、その長にも就任する。すなわち、言わばどこか依存性の強い二代目のぼんぼんのようなであった彼が、自分で決断する一人前の人間として成長し、今や栄光のイングランドの到来を確信させる世継ぎの姫君をもうけた立派な国王となる。聖俗両方の頂点に国王が君臨する絶対王政の成立である。女王のもと、そしてさらにその後のジェームズ一世の代においても国家はますます繁栄の一途をたどるとまで、クランマーによって、予言される。

平和、豊穡、慈悲、真実、畏怖という、それまでは
この選ばれた幼き姫君にお仕えしていた召使たちも、
そのときは新王の忠臣として葡萄の蔓のようにそのお身に
慕いつくでしょう。そして天に太陽が輝くかぎり、
新王の栄誉と名声はますます高まり、そのご威光により
新たに臣下となる国々が続出するでしょう。 (5. 4. 47-52)

ここで言われている「新たに臣下となる国々」とは、1607年のジェームズタウン建設に続いて翌年にはじまった新大陸におけるヴァージニア植民のこと⁽²⁸⁾と考えられる。

ところで、この作品が書かれた1613年は、ジェームズ一世の長女エリザベスがプファルツ選帝侯フリードリヒ五世と結婚式を挙げた年である。実は前年に彼女より2歳年上の皇太子で国民の人気も高かった長男ヘンリーが18歳で病死しており、その悲しみを掻き消すように大層盛大な婚礼の儀式を挙行したと想像するのは難くないだろう。そこでエリザベスという同名の王女の前途への慶祝が重なって、一種のナショナリズムが増幅されるのはまちがいないと思われる。かくしてテキストはこのような『女王陛下万歳』（現在歌われる英国国歌を想起）を奏でる賛歌を称揚して閉幕するように見える。

しかし、この時期、スコットランドやアイルランドでの度重なる反乱や北部諸公の乱、カトリック勢力のテロ事件（エリザベス女王暗殺計画が摘発されたスロックモートン事件（1583）、メアリー・スチュアートが係ったとされる女王暗殺を狙ったバビントン事件（1586）、女王に寵愛されてきたエセックス伯の謀反（1601）、さらにジェームズ一世の爆殺を狙った火薬陰謀事件（1605））、など不穏な大事件が続出している。やがてテューダー朝の黄金時代と称されるエリザ

ベス一世の治世に続くスチュアート朝のジェームズ一世は、この王権の絶対性をイデオロギー的に補強する王権神授説を信奉する⁽²⁹⁾。しかし、逆に言えば、このようなイデオロギーで補強しなければならないほど水面下では体制の存在理由そのものへの疑念も渦巻いていたとも考えられる。

テキストは、したがって、カトリックの殉教者トマス・モアの処刑や、メアリー一世による反動の嵐とその後の彼女の運命については、あえて一切触れない。しかしカトリック勢力の脅威が侮れないものであることはさすがに無視できるものではない。反プロテスタントの陰險なガードナーの策動が王によって危うく阻止される場面が見られるが、枢密院内には彼を支持する人間は依然として少なくないし、彼らはひとまず矛を納めたにすぎないという印象が残されるのは確かだろう。

さらに、テキストは、その唱導する王朝絵巻の感動に冷や水をかけるような、猥雑でエネルギッシュで胡散臭い、まるで民衆的、祝祭的広場の笑いというバフチーン的グロテスク・リアリズム⁽³⁰⁾を同時代のロンドンの観客の生活感と共鳴させる場面を挿入している。しかし、かつて主役を食わんばかりに大活躍した巨漢で、大酒飲みで、部類の女好きで、法螺吹きのフォールスタッフや、灼熱地獄に例えられる赤鼻の持ち主でこそ泥のバードルフ、喧嘩早いが実は腰ぬけのピストル、女郎屋の女将クイックリーといった彼の悪党仲間たちの形象⁽³¹⁾は、今や、門番とその手下が語る野卑で陽気な法螺風のエピソードの中で言及される異様な人物たちにその残滓が認められる程度になっている。16世紀フランスルネサンス期の作家であるラブレー研究を通してバフチーンが民衆の笑いの史的変遷を分析したように、17世紀初頭の英国においても、「ルネサンスの民衆文化の伝統」⁽³²⁾がすでに舞台の片隅に退きはじめていると言わざるを得ない。

この作品は、一方で、そのような極めて下世話な民衆的、祝祭的笑いのエピソードによる権力闘争のパロディーや、王の離婚問題におけるセクシュアリティの意義のほめかしによって、価値逆転を起こしたり相対化する視点も提供している。しかし、同時に、近代英国の自立の初期的段階におけるヘンリー八世の国王としての資質の獲得過程を、あえて理想化して描こうとするものである。それは、ジェームズ一世が即位して10年経った時点で、やがてその子のチャールズ一世治下の内乱と革命（清教徒革命（1641-1649））への萌芽と考えられる諸矛盾が散見される中で、すでに神格化が起きているエリザベス女王の繁栄と栄光の時代に対する観客の郷愁的幻想に繋いで、ことさら豪華な仕立ての舞台で試みられる。

注

- (1) cf. *Introduction to The New Cambridge Shakespeare King Henry VIII* edited by John Margeson, Cambridge University Press, 1990, pp. 4-14.
- (2) 『概説イギリス史』、青山吉信編、有斐閣選書、1982年、83-84頁参照。
- (3) TVドラマ『THE TUDORS～背徳の王冠～』シリーズ（原題：*The Tudors*、マイケル・ハースト脚本、モーガン・オサリバン製作総指揮、アメリカ・カナダ・アイルランド・イギリス合作、2007-2010年参照。

- (4) cf. J. P. Sommerville, *Henry VIII and Wolsey*
(<http://faculty.history.wisc.edu/sommerville/361/361-06.htm> 5/01/2012)
- (5) 産褥熱で死亡した3番目の王妃ジェーン・シーモアとの間に生まれたエドワード六世は病弱で、15歳で病死している。
- (6) ヘンリー八世にとってのバッキンガムの潜在的脅威はピーター・サッチョも指摘している。cf. Peter Saccio, *Shakespeare's English Kings*, Oxford University press, 1977, p. 217
- (7) cf. the footnotes to 1. 1. 221 and 1. 2. 147 in *The New Cambridge Shakespeare King Henry VIII* op. cit.
- (8) ホリンシェッドによると、秘書官のサー・ギルバート・パークも司祭とされている。
cf. the footnote to 1. 1. 219 in *ibid*.
- (9) 彼は1521年にローマ法王レオ十世から「信仰の擁護者」('fidei defensor')の称号を与えられた。
- (10) 史実では、1524年に出された、収入の中から平信徒には6分の1、聖職者には3分の1を徴税する、いわゆる"Amicable Grant"。cf. Peter Saccio, op. cit. p. 214
- (11) 『NHKシェークスピア劇場 ヘンリー八世』日本放送協会編集 NHK サービスセンター発行 昭和57年、64頁脚注参照。
- (12) 史実では、その死はウルジーの死後。同書53頁注参照。
- (13) 『聖書』新解訳、新解訳聖書刊行会訳、日本聖書刊行会、昭和45年。
- (14) 不在の第四幕を経て第五幕においてヘンリー八世がリーダーシップを発揮することはオックスフォード・ワールド・クラシックス版の序でも指摘されている。cf. *Introduction to The Oxford Shakespeare (Oxford World Classics) King Henry VIII*, edited by Jay L. Halio, Oxford University Press, 1999, p. 35
- (15) かつてウルジーが彼女のことを「熱心なルター信者」(3. 2. 99)と指摘していた。
- (16) 『リチャード二世』の開幕の場で、王が、自らセットしたボリングブルックとモーブレーの決闘をいざという瞬間に中断させて、威厳ある審判者としての自分の権威を示そうとしたが、追放期間をすぐ変更するといったような曖昧な仲裁によってかえって両者に不満を残して、むしろ権威の失墜を露呈するという逆効果になった。(撰著『シェイクスピアの歴史劇』、近代文芸社、2006年、163-165頁参照。)
- (17) 前掲『NHK シェークスピア劇場 ヘンリー八世』75頁脚注参照。
- (18) 映画『我が命尽きるとも』(原題：*A Man For All Seasons*、フレッド・ジンネマン監督、アメリカ、1966年)参照。
- (19) 前掲『NHK シェークスピア劇場 ヘンリー八世』94頁脚注参照。
- (20) このような彼女の否定的側面は、今日しばしば形象化されてお目に掛かることがある。例えば、前掲TV映画『背徳の王冠』シリーズや映画『ブーリン家の姉妹』(原題：*The Other Boleyn Girl*、ジャスティン・チャドウィック監督、アメリカ・イギリス合作、2008年)参照。
- (21) cf. *Introduction to The Arden Shakespeare (third series) King Henry VIII* edited by Gordon McMullan, London, 2000, p. 130 ちなみに、ホリンシェッドの『年代記』では、彼女は、ただ「しばらく立派な椅子に座って休んだ」とあり、民衆にその美しさをさらしたという記述は見られない。
- (22) これは、原文では"Paris garden"となっており、16世紀から18世紀にかけてロンドンにあった牛攻めやクマイじめが開催された騒々しい大衆娯楽の地区のこと。
- (23) 当時のロンドンでは見世物としてアメリカ・インディアン(アメリカ先住民)が民衆の好奇の目を集めていた。cf. footnotes to *Arden Shakespeare (third series) Henry VIII* op. cit., and *The Oxford Shakespeare (Oxford World Classics) King Henry VIII* op. cit.
- (24) タワー・ヒル、ライムハウスともに当時のロンドンの危ない地区。cf. footnotes to *The Oxford Shakespeare (Oxford World Classics) King Henry VIII* *ibid*.
- (25) 例えば、BBC制作のTVシリーズ(1979)ではこの場はそっくりカットされている。

- (26) ちなみに映画『ヘンリー八世の私生活』(原題: *The Private Life of Henry VIII*, アレクサンダー・コルダ監督, イギリス, 1933年)は, アンの処刑に集まる群衆の歓声から始まる.
- (27) Arden Shakespeare (third series) *Henry VIII* op. cit. や The New Cambridge Shakespeare *King Henry VIII* op. cit. その他の序文内の「上演史」の項参照.
- (28) cf. *Introduction to Arden Shakespeare (third series) Henry VIII* op. cit., p. 72
- (29) 彼は「自由なる君主国の真の法」(1598)という論文を書いてその立場を明らかにした.
- (30) 物質的, 肉体的原理に基づく笑いの民衆文化の特徴をなす美的概念としてパフチーンは「グロテスク・リアリズム」を提唱している. ミハイール・パフチーン, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(川端香男里訳, せりか書房, 1980年) 23-56頁参照.
- (31) シェイクスピアの『ヘンリー四世・第一部』, 『ヘンリー四世・第二部』参照.
- (32) 前掲『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』参照.

尚, 引用部分はアーデン版 (Arden Shakespeare (third series), 2000) を使用し, その日本語訳は小田島雄志訳『シェイクスピア全集 VII』(白水社, 1980年)を参考にした. したがって, 引用部分の行の数え方に原文と訳文の間で一部齟齬が見られることになっている.